

御挨拶にかへて

副會長 垂井増太郎

全く豫期してゐない事でした。私のやうな素養のない、経歴のない、知識のないものが、こんな光榮ある東亞天文協會の副會長に御推薦賜はらうとは。あまりの突然に全く驚いた事で、皆様になんと御挨拶申上げてよいやら、實は迷つてしまつた事であります。

しかし考へて見ますと、東亞天文協會が、あの吉田の學生集會所で發會式をあげた時は、實に大正9年の6月25日で、雷鳴すさまじい中に孤々の聲をあげたのであります。名もなつかしい天文同好會といつたそのころから、今日まで實に10有8年、既に二た昔となつてゐます。私も實はその頃から會員の仲間入をさせていたゞいたのであります。其後時に會に消長もあつたやうな氣も致しますが、唯發展の一路をつき進んで、今日のやうな盛大な東亞天文協會に建設させたのは全く、山本一清先生、水野千里先生を始め、御熱心な幹事諸先生の方々の御努力のしからしむる所で、私ども會員の一人として全くすぎたよろこびであり、感激致してゐる次第であります。

會の目標として單に天文に關する知識の普及のみとは考へてゐないで、星すぎの普及をモットゝとする所に、會の大きなめじるしがあるのではないかと私は感じてゐます。星をよく知る人よりも、星にあこがれる人であれ。これこそほんとうの星すぎであり、眞剣な星の研究者だと存じます。自然科學は、どの部分をとつても皆神祕だと思ひますが、とりわけ星の世界には一層の神祕があり、それだけあこがれも多いと思ふのであります。今日の文化人は文化人であるだけ、星へのあこがれが強いのを思ひます。

私も星にあこがれる一人であります。同志の皆々様と共に思ふ存分、星へのあこがれを持ちたいものだと思ひます。幸ひ同じ趣味に生きる方々と共に、責任の一端を果し得たら、身にあまる光榮と存じます。感じるまゝに御挨拶申上げます。